

〔書 評〕

ハリエット・アン・ジェイコブズ著、  
堀越ゆき訳

『ある奴隷少女に起こった出来事』

(新潮社, 2017, p. 343)

軽 部 恵 子

本書は、アメリカ合衆国南部に奴隷として生まれたハリエット・アン・ジェイコブズ (Harriet Ann Jacobs, 1813-1897) が自身の体験を記したものである。原題は、Incidents in the Life of a Slave Girlで、1861年にボストンで出版された。邦訳は、2001年に明石書店から小林憲二編訳『ハリエット・ジェイコブズ自伝』として、詳細な注釈と解説とともに出版された。堀越ゆき訳の本書は、2013年にハードカバーで大和書房から出版され、2017年に新潮文庫として出版された。

著者が「著者による序文」できっぱりと書いているとおり、この物語は小説 (フィクション) ではない。「訳者あとがき」にあるとおり、その後行われた数々の研究によっても確かめられている。ただし、文中の一部の地名と人物には偽名が用いられている。「わたし個人のことにに関して真実を隠す意図は毛頭ありませんが、わたしの周囲にいた人々のためにそうさせていただきました」(p. 13)。

元奴隷による体験談や自叙伝は決して珍しくない。第86回アカデミー作品賞を受賞した2013年公開の映画『それでも夜は明ける』(原題 Twelve

Years a Slave) の原作は、自由黒人でありながら誘拐され、12年間奴隷にされていたソロモン・ノーサップ (Solomon Northup) の同名自叙伝 (1853年出版) である。映画の中で、残忍な白人男性たち (プランテーション所有者や奴隷の監督官) が黒人奴隷たちにむち打つ場面が幾度となく出てくるが、血が飛び散り肉のちぎれる生々しい場面も、『ある奴隷少女に起こった出来事』で描かれた場面に比べれば、映像の特殊効果と思わされる。それだけ、本書の描写は力強い。

評者は、アメリカ ABC テレビによるドラマ『ルーツ』(1977年制作) を子どもの頃に観て衝撃を受け、その後奴隷制や公民権運動を描いた映画、アメリカ PBS によるドキュメンタリー番組など、数多くの映像作品を鑑賞し、書籍を読んできた。ゆえに、奴隷制度についてそれなりに知っているつもりであった。しかし、どんな作品や著作も、本書で語られた数々の差別、理不尽 (たとえば、奴隷が必死に貯めた金を、主人が「借りる」と言って持ち出して返さないのは序の口である)、性暴力とその脅威には及ばない。

2009年、オバマ大統領はアメリカ史上初の有色人種の大統領となったが、ケニア人留学生とアメリカの白人女性の子であり、奴隷の子孫ではなかった。その点、奴隷の子孫であるミシェル夫人は夫より人気があったともいうが、奴隷が受けてきた非道の数々を考えれば、驚きではない。実際、奴隷の苦難を「筆舌に尽くしがたい」と形容するのは、陳腐にすら思える。

同時に、奴隷売買で家族を引き裂かれ、好色で残忍な白人男性から逃れるべく、好きでもない白人男性の子を身ごもることをあえてした著者のジェイコブズが、自尊心と崇高な魂を失わず、自分の人生を切り開いたことに感嘆するばかりである。本書を読んだ人は、現在どのような境遇にあっても、大いに勇気づけられよう。

本書の原書が世に出た経緯は数奇である。前述のとおり、ジェイコブズ

ハリエット・アン・ジェイコブズ著，堀越ゆき訳『ある奴隷少女に……』

が1861年に「リンダ・ブレント」名で自費出版したものの、「読み書きができないはずの奴隷が書いたとは思えない知的な文章」(p. 320)，若い奴隷女性が所有者側の白人から受けたハラスメントと性暴力の数々，逃亡後の7年にわたる屋根裏での潜伏生活など，あまりに衝撃的な内容により，フィクションとして忘れ去られていた。それが再発見されたのは，奴隷解放運動家の残した古い書簡の束に，ジェイコブズの手紙が含まれ，その文体が「リンダ・ブレント」と同じであると気づいた歴史学者のイエリン (Jean Fagan Yellin) がいたからである。1987年にアメリカで原著が再度出版されると，大変な注目を集めた。歴史を掘り起こす作業は，世代を超えて連綿と続けられる努力の成果であると改めて感じた。

同様の賞賛は，原書を日本語にした堀越ゆきにも与えられるべきである。訳者は，東京外国語大学とジョージ・ワシントン大学大学院を卒業し，世界最大手のコンサルティング会社に務めるビジネスパーソンである。本人が述べるとおり，出張で乗った新幹線の中で，時間つぶしに Kindle ストアを見ていた時に原著に出会った。「ふと懐かしい『ジェイン・エア』を読む気になり，……世界古典名作ランキングの上位に『ジェイン・エア』はすぐ見つかった。そのそばにちょこんと並んでいたのが，本書だった」(p. 325)。堀越は，最初の数行を読んで衝撃を受け，新幹線が目的地に到着するまでの3時間を，Kindle が映る携帯電話を握りしめながら過ごしたという (同)。何という偶然か。もちろん，訳者に『ジェイン・エア』を読むだけの教養と，現代日本の女性が置かれている状況に対する問題意識がなかったら，本書が誕生しなかったのは言うまでもない。また，脚注などを最小限にして，ジェイコブズの魂の叫びを日本語に直すことに見事に成功した。評者から訳者に対し，心からの敬意を表したい。

堀越は，「訳者あとがき」で，ジェイコブズとその兄弟，子どもたちのその後の人生を記している。これだけでも，実にドラマティックである。

著者は、解放奴隷のための学校を創立するなどしたが、経済的には決して恵まれず、娘に看取られながら、84年の天寿を全うした (pp. 333-334)。母をみとった娘ルーザ・マチルダは、少女時代を奴隷として過ごしたが、のちに母に引き取られ、高等教育を受け、黒人教師として同胞のために生涯をささげた。ジェイコブズの最愛の息子ジョセフは、一攫千金を求めて叔父のジョン (ジェイコブズがかわいがっていた実弟) とともにカリフォルニア州、そして最後はオーストラリアに渡り、1860年ごろに自殺したという (p. 335)。

ちなみに、前述のソロモン・ノーサップがどのように生涯を終えたかはわかっていない。ブリタニカ百科事典オンライン版によると、ノーサップは1853年に自伝を出版し、1857年にカナダで公衆の前に現れたのが最後となり、1860年の国勢調査には記録がない。彼の妻アンは1876年に逝去した。これだけ見ても、愛娘に看取られ80余年の生涯を終えたことが確認されているジェイコブズは、総体として「幸せ」であったのではないか。

最後に、社会の中でもいまだに性暴力は蔓延している。2017年に始まった#MeToo運動にみられるように、映画界、一般の企業などで、弱い者が性的な便宜供与を求められるケースは後を絶たない。2018年のノーベル平和賞は、コンゴ民主共和国の医師デニ・ムクウェゲとイラクの少数派ヤジディー教徒の女性ナディア・ムラドであった。前者は、武力紛争下で性的虐待やレイプに苦しむ女性を救ってきた「ドクター・ミラクル」で、後者は2014年にイスラミック・ステート (IS) に性奴隷にされたが3か月後に脱出し、以来、性暴力とたたかってきた活動家である。本書を紹介することで、評者も性暴力に対する社会の問題意識を高めることに少しでも貢献できれば幸いである。

ハリエット・アン・ジェイコブズ著，堀越ゆき訳『ある奴隷少女に……』

<参考サイト>

Biography, “Solomon Northup,”

<https://www.biography.com/writer/solomon-northup>

accessed June 7, 2019

Civil War Era NC, “Jean Fagan Yellin, *Harriet Jacobs: A Life (2004)*,”

<https://cwnc.omeka.chass.ncsu.edu/items/show/232>

accessed June 7, 2019

Documenting the American South, “Incidents in the Life of a Slave Girl,”

<https://www.docsouth.unc.edu/fpn/jacobs/jacobs.html>

accessed June 7, 2019

Encyclopedia Britannica, “Solomon Northup,”

<https://www.britannica.com/biography/Solomon-Northup>

accessed June 7, 2019

The University of North Carolina Press, “The Harriet Jacobs Family Papers,”

<https://www.uncpress.org/book/9780807831311/the-harriet-jacobs-family-papers/>

accessed June 7, 2019

The White House, “Michelle Obama,”

<https://www.whitehouse.gov/about-the-white-house/first-ladies/michelle-obama/>

accessed June 7, 2019